大分県文化財調査報告書　第118輯

国道197号南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

虫　喰　谷　遺　跡

２００１

大分県教育委員会

国道197号南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

虫喰谷遺跡

（むし くい だに）

２００１

大分県教育委員会

序　　文

大分県は2002年ＦＩＦＡワールドカップ日本・韓国の開催地のひとつとなり、会場へのアクセス道路も整備されつつあります。今回調査の原因となった国道197号南バイパス道路改良工事もそのひとつです。

今回報告する虫喰谷遺跡は、小規模な遺跡でありましたが、縄文時代早期の集石遺構が発見され、当時の社会生活を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。本書が今後、学術的にもまた教育的にも広く活用されれば幸です。

最後に、この発掘調査に多大なるご協力をいただきました関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成13年３月31日

大分県教育委員会教育長

田　中　恒　治

例　　言

1．本報告書は、国道197号南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査は、大分県土木建築部スポーツ公園建設部の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。発掘調査を平成11年６月15日より７月２日の間実施し、整理及び報告書刊行作業を平成12年度に行った。
3．遺構の実測は宮田剛が主に行い、東保春奈、平野真由美の助力を得た。
4．遺物の実測は後藤一重、宮田剛が行った。
5．遺構の写真撮影は宮田剛が行った。
6．本書に用いた方位は磁北である。
7．本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。
8．本書の執筆・編集は後藤一重が行った。

目　　次

第１章　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査団の構成 …… 1
第２章　地理的歴史的環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の概要 …… 6
　1　遺跡の位置と調査区 …… 6
　2　虫喰谷の基本層序 …… 7
　3　弥生時代以降の遺構検出状況 …… 7
　4　縄文時代の遺構 …… 8
　　集　石 …… 8
　5　出土遺物 …… 10
　　土　器 …… 10
　　石　器 …… 12
第４章　ま と め …… 13

第１章　はじめに

１　調査に至る経過

本遺跡は、大分市大字松岡字虫喰谷に所在する。

遺跡のすぐ北側の谷には東九州自動車道が東西に走り、谷を隔てた丘陵は「2002年ＦＩＦＡワールドカップ日本・韓国」大分開催の会場となるドーム競技場を中心とした県スポーツ公園が広がる。県スポーツ公園とその周辺の地はスポーツ公園の計画が提示されるまでは、緑豊かな自然があふれる場所であった。しかし、2002年ワールドカップサッカー開催の会場となるドーム競技場を中心とした広大な県スポーツ公園の造成に伴い、東九州自動車道、県スポーツ公園へのアクセス道路建設、さらにそれに伴う開発として大型商業施設を中心とした住宅団地造成と、この数年間の間に地域の景観が一変する驚異的な変化をとげつつある。なお、県スポーツ公園の建設にあたって、多くの貴重な遺跡が発見され、県教育委員会で発掘調査した。

毎年、大分県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と工事の円滑な実施を目的として、県土木建築部所管の全事業について埋蔵文化財の有無を事前に調査している。本遺跡は、県スポーツ公園建設部が実施する国道197号南バイパス道路改良事業地内にある。県スポーツ公園建設部所管の国道197号南バイパス道路改良事業を含め、平成10年度県土木建築部実施予定事業の一括協議が、平成９年度に県土木建築部企画検査室から県教育委員会にあった。県教育委員会では、一括協議のあった県土木建築部実施予定事業すべてについて事前の分布調査を行い、Ａ周知遺跡の地区、Ｂ遺跡の可能性が高く試掘調査が必要な地区、Ｃ遺跡の可能性があり立会調査が必要な地区、Ｄ遺跡の可能性が低く工事着手に問題のない地区に分け、土木建築部企画検査室に回答した。スポーツ公園建設部所管の国道197号南バイパス道路改良事業については、遺跡の可能性が高く試掘調査が必要な地区と判断された。これを受け、用地買収や伐採の終了した平成10年度に、県教育委員会が試掘調査を実施した。その結果、一部において遺跡の存在を確認した。また、事業予定地南側の丘陵では数基の須恵器窯跡が点在する松岡古窯跡群が存在し、そのうちの１基が隣接する位置にある。本地区は、窯跡前面の平坦面にあたり、須恵器窯跡に伴う工房跡等の可能性も想定された。

本調査は、県教育委員会が県スポーツ公園建設部からの依頼により、平成11年６月15日から７月２日までの間実施した。

２　調査団の構成

虫喰谷遺跡調査団の構成は、以下の通りである（役職は平成11年度当時のもの）。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	田中　恒治	大分県教育委員会教育長	
	山本　芳直	大分県教育庁文化課課長	
	田原　基之	同	参事兼課長補佐
調 査 員	清水　宗昭	同	課長補佐兼埋蔵文化財第２係長
	坂本　嘉弘	同	主幹
	宮内　克己	同	副主幹
	後藤　一重	同	主査（調査・報告書担当）
	宮田　　剛	同	嘱託（調査担当）
	東保　春奈	同	嘱託
	平野真由美	同	嘱託

第２章　地理的歴史的環境

１　地理的環境

祖母山系に源を発する大野川は、犬飼町から大分市上戸次にいたる狭あいな地形を抜けると、大分市中戸次、松岡、鶴崎にかけ左右両岸に沖積面を形成しながら別府湾に注ぐ。虫喰谷遺跡は大野川左岸の丘陵の中に位置する。この丘陵は、九重層群、大分層群、碩南層群からなり、大野川左岸側は広義の大野川の侵食により数面の段丘が形成されている。松岡付近の段丘面は、下位から沖積面、松岡面、冬田面、横尾面と呼ばれている。沖積面には現在、大野川に加え乙津川が流れており、これらの河川に左右の丘陵から小河川が注ぐ。松岡面は砂礫層からなり、河岸段丘として形成されたものである。その先端が沖積面下に埋没することから、１万年から１万２千年前に位置づけられる最終氷期（ビュルム氷期）の末期に形成されたものと考えられている。冬田面は標高30から40ｍを測るもので、円礫からなる砂礫層により形成される。形成要因はやはり河岸段丘で、最終氷期（ビュルム氷期）の中頃の形成であろう。横尾面は鶴崎台地で最も広く広がる段丘面で、下流部から連続的にみられる。標高43から50ｍで、上流に行くにつれ高くなる。この横尾面は、１万４千年から２万年前に位置づけられるリス氷期末期に形成されたものと考えられている。一方、沖積面に目を向けると河道跡が様々に認められ、その数は下流部にいくにつれ多くなる。また、河道跡に沿い自然堤防の発達もみられ、その上には現在の集落が顕著にみられる。沖積面下のボーリングデーターによれば、基底礫層の上にシルトなどの泥層の堆積みられ、その厚さは海岸部で60ｍにも達する。この泥層中には、下流から高田小学校までは貝化石を含み、それよりも内陸になると腐植物混じりのシルト層になる。さらに松岡周辺では、砂礫層が優勢になるという。また、泥層中には約6000年前に降下したというアカホヤ火山灰の堆積も確認されていることから、縄文海進のころの海が現在の高田小学校の付近までは確実に入っていたことが分かる。

虫喰谷遺跡は標高60ｍを測り、丘陵を開析する小河川に望む位置にある。その位置は横尾面にほぼ相当し、旧石器時代以降非常に安定した地理的環境であったことが分かる。

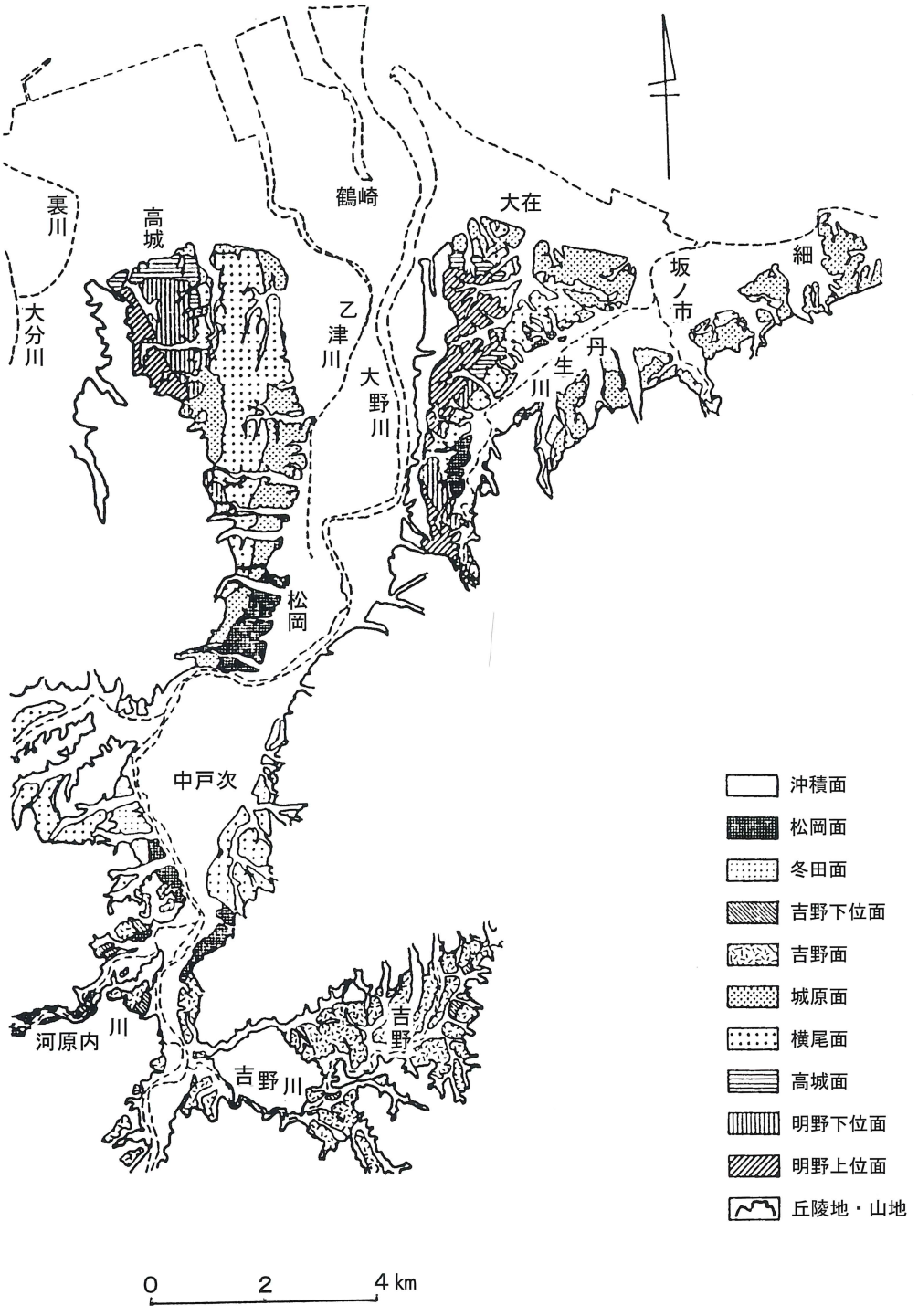
２　歴史的環境

虫喰谷遺跡がある大野川下流域には、旧石器時代以来の多くの遺跡がみられる。ここでは、虫喰谷遺跡が位置する大野川左岸の丘陵内の遺跡を中心にその概略を述べる。

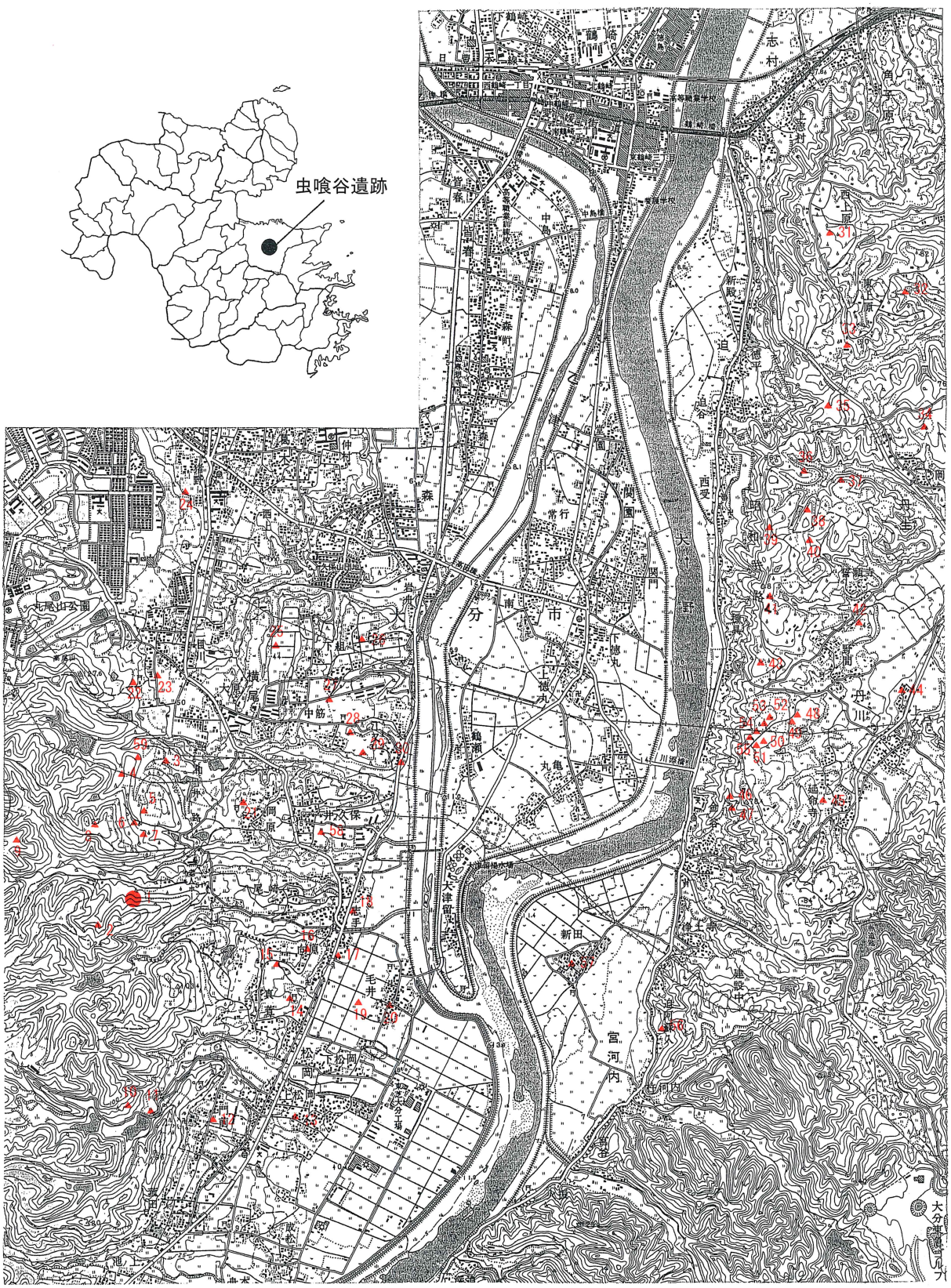
大野川下流域には、旧石器時代の遺跡が多く分布する。大分市域にあっては、この時期の遺跡が顕著に集中する地域と言える。虫喰谷遺跡と谷を挟んだ北側では、スポーツ公園建設に伴い一方平Ⅰ遺跡、一方平Ⅱ遺跡、九池遺跡などの旧石器時代遺跡が調査されている。特に、一方平Ⅰ遺跡は遺跡の規模・遺物の出土量などから、当地域における代表的な遺跡と考えられる。このような旧石器時代遺跡は、大野川をはさむ対岸の丹生台地にも同様に集中している。以上のような遺跡集中の一因として、大野川下流域両岸の山系や台地上に石器石材である流紋岩の産出が認められることがあげられる。縄文時代では、早期の遺跡が比較的多くみられる。隣接するスポーツ公園建設用地内の調査でも、一方平Ⅰ遺跡、一方平Ⅱ遺跡などの遺跡が確認されており、丘陵地内に小規模な遺跡が点在することが想定される。虫喰谷遺跡も、このような遺跡のひとつとして考えられるであろう。

古墳時代では、沖積面の微高地上に６世紀代の有力な集落である毛井遺跡Ｂ地区が確認されている。虫喰谷遺跡の南方に数十基からなる一ノ谷横穴墓群が所在するが、毛井遺跡Ｂ地区との関係が注目される。

近年の調査で最も注目されるのは、松岡古窯跡群の発見であろう。これまで、大分市内はもとより豊後地域では須恵器焼成窯は確認されていなかった。虫喰谷遺跡背後の丘陵中に確認されたのは４基の窯跡で、当地域は須恵器生産地としてクローズアップされることとなった。このほかスポーツ公園建設用地内では、一方平Ⅰ遺跡、上牧ノ内Ⅰ遺跡、上牧ノ内Ⅱ遺跡など古代の土器が一括して出土する祭祀的性格の強い遺跡が確認されている。日向へ向けた古代官道をこの辺りに比定する説もあり、当地域は、現在の森林に覆われた単なる丘陵ということではなく、古代では交通路、土器生産地、祭祀の地といった様々な顔を有していた地域と言える。



第１図　大野川流域の地形面分類図（「大分市史」上1987より）



第２図　虫喰谷遺跡と周辺の遺跡

虫喰谷遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
1	虫喰谷	松岡字虫喰谷		◎			◎		
2	松岡古窯跡	松岡					◎		
3	一方平Ⅰ	横尾字一方平	◎	◎					
4	一方平Ⅱ	横尾字一方平	◎	◎					
5	丸池	横尾字丸池	◎	◎			◎		
6	論出	横尾字論出	◎				◎		◎
7	牧ノ内	横尾字牧ノ内	◎	◎			◎		
8	一方平Ⅲ	横尾字一方平	◎				◎		
9	上牧ノ内Ⅰ	横尾字牧ノ内					◎		
10	一谷横穴墓群	松岡字寺田				◎			
11	一谷南横穴墓群	松岡字寺田				◎			
12	門前	松岡字門前			◎				
13	上松岡	松岡字上松岡			◎				
14	真萱石棺	松岡字真萱				◎			
15	真萱	松岡字真萱	◎					◎	
16	向原	松岡字向原			◎			◎	◎
17	清水	横尾字清水			◎				
18	久保田	松岡字久保田					◎	◎	◎
19	毛井A	毛井				◎		◎	◎
20	毛井B	毛井				◎		◎	◎
21	岡原	横尾字向原			◎				
22	銅矛出土地	横尾字高尾			◎				
23	二目川	横尾字高尾			◎		◎		
24	米良草	猪野時米良草			◎				
25	横尾下組	横尾字下組			◎				
26	多武尾	横尾字横尾	◎		◎				
27	東中尾	横尾字東中尾			◎	◎			
28	有田古墳	横尾字有田				◎			
29	有田	横尾字有田			◎	◎			
30	横尾貝塚	横尾字下横尾		◎					
31	上ノ原北	角子原字西上原							◎
32	東上ノ原	角子原字東上原			◎				
33	岡	丹生字岡			◎				
34	下	丹生字下				◎			
35	平形銅剣出土地	丹生字岡			◎				
36～43	丹生遺跡群	丹生	◎	◎					
44	大友親著墓	丹生						◎	
45	延命寺	丹生字延命寺		◎	◎				
46	野間古墳９号墳	丹生字野間				◎			
47	野間古墳10号墳	丹生字延命寺				◎			
48	野間古墳８号墳	丹生字野間				◎			
49	野間古墳７号墳	丹生字野間				◎			
50	野間古墳４号墳	丹生字野間				◎			
51	野間古墳１号墳	丹生字野間				◎			
52	野間古墳６号墳	丹生字野間				◎			
53	野間古墳５号墳	丹生字野間				◎			
54	野間古墳３号墳	丹生字野間				◎			
55	野間古墳２号墳	丹生字野間				◎			
56	阿蘇入横穴墓群	宮川内字阿蘇入				◎			
57	新田	宮川内字新田				◎			

第３章　調査の概要

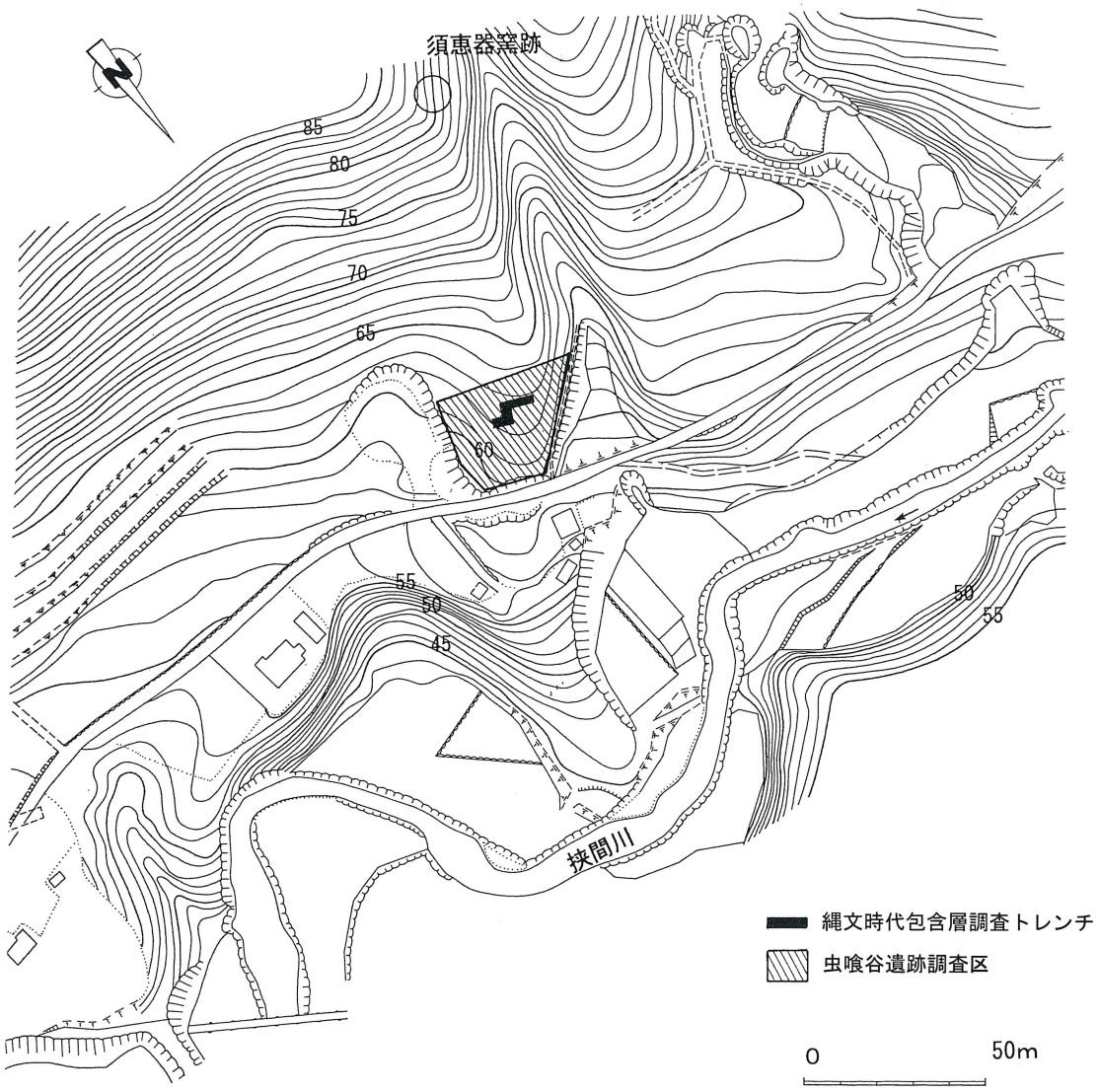
１　遺跡の位置と調査区

虫喰谷遺跡は大野川左岸の丘陵上に位置し、標高は62ｍを測る。遺跡の北側には、丘陵を開析し東流する挟間川がある。挟間川は大野川の支流である乙津川に流れ込む小河川で、遺跡付近では山間の渓流という状況である。狭間川沿いには平坦面がほとんどなく、遺跡は挟間川河床との比高差約15ｍを測る丘陵部の裾部に位置する。丘陵部の裾部は、谷部と尾根部が交互に見られるが、尾根部の緩傾斜の場所に遺跡は形成されている。まとまった平坦面が少ない当地域にあっては、数少ない居住可能な地といえる。

前章でも述べたように、大野川下流域両岸の台地あるいは丘陵上には旧石器時代や縄文時代早期の遺跡が集中する。遺跡には大規模なものもあるが、総じて小規模なものが多い。これらの遺跡のあり方は、当時の社会集団を考えるうえに興味深い。

また、遺跡の西側にあたる背後の丘陵には松岡古窯跡群の窯跡が点在する。遺跡のすぐ西側にも窯跡が１基みられ、その位置関係から、当遺跡の部分がこの窯跡と大きく係わる作業場的空間ではないかとも推測された。

以上を念頭におき、丘陵裾部の緩斜面を呈する平坦面に調査区を設定した。まず、バックフォーを使用し表土



第３図　虫喰谷遺跡周辺地形図

を除去し、遺構の検出につとめた。その後、旧石器時代や縄文時代の遺構や包含層を確認するためトレンチを設定し、作業員による掘り下げを行った。

2　虫喰谷遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は、以下のとおりである。

１a層は暗褐色の腐食土層である。当地は雑木が茂る山林であったため、10cmから20cmの腐食土層が形成されている。

１b層は黒褐色を呈するもので、２層との漸移層的性格を有するものである。１a層が軟質であったのと比べると比較的硬くしまった感じである。

２層は明褐色の砂質層である。火山ガラスを多く含むもので、礫はほとんどみられない。これはアカホヤ火山灰の風化堆積土壌と考えられるが、調査区を設定した尾根上部の緩斜面では層厚10cmから20cmで、流失のためか周辺の斜面部より薄い堆積である。この上面で遺構の検出を行った。

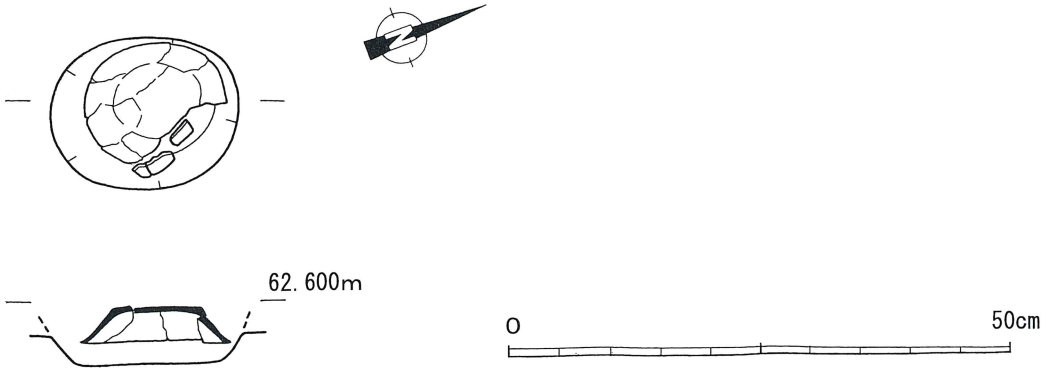
３層は暗黄褐色を呈する。２層に比べると粘質が強く、ややしまった感じである。４a層には漸移的に移行し、４a層以下で顕著にみられる小礫がわずかに含まれる。層厚10cmほどで、縄文時代早期の包含層である。

４a層は褐色土で、粘質を呈する。径２cmから５cmの小礫を含む。４b層も基本的には４a層と同様であるが、含む小礫が５cmから15cmと大きくなる。

3　弥生時代以降の遺構検出状況

前述したように、遺跡西側の丘陵斜面には松岡古窯跡群の窯跡が点在する。遺跡のすぐ西側にも窯跡が１基あり、この窯跡と当遺跡が所在する部分は、地形的に窯跡とその全面に広がる平坦面という関係にある。また、わずかではあるが古代に位置づけられると推定される土器の細片も確認できた。これらの状況から、当地は窯跡に大きく係わる作業場的施設などが存在するのではないかと推測された。これとは別に、調査区周辺で弥生時代あるいは古墳時代のものと考えられる土器片も採集されたことから、弥生・古墳時代の遺構が検出される可能性も想定された。

以上をふまえ、第３図に示すように丘陵裾部の緩斜面を呈する平坦面に調査区を設定した。調査では、バックフォーを使用し調査区全体の１a層と１b層を除去し、２層上面で遺構を検出した。この２層の平坦面での堆積は薄く、10cm前後のところもあった。これに対し斜面部は比較的厚く、30から40cmを測る。２層上面における遺構検出作業の結果、確認された遺構は数基の現代の土壙のみで、他の遺構は全く検出されなかった。また、遺物も



第４図　虫喰谷遺跡土器埋納遺構

全く確認されなかった。

ここまでの作業で、窯跡に関連する遺構や弥生・古墳時代の遺構が調査区内に存在しないことが確認された。しかし、２層がアカホヤ火山灰の風化堆積土壌であるという性格を考え、この２層もすべて除去し再度３層上面で遺構検出作業を行った。その結果、柱穴状の小土壙が１基確認されたのみで、他には遺構・遺物は確認することができなかった。

柱穴状の小土壙（第４図）は、径15cm程の円形を呈し、深さは現状で10cm弱である。小土壙からは、土師器坏の完形品（第７図７）が底部を上にした状態で、床面よりやや浮いた状況で出土した。周辺に生活関連の遺構や遺物がまったく確認されないことから、この遺構は意識的な埋納遺構と考えられ、祭祀的性格を色濃く感じさせる。遺跡が丘陵を深く開析して東流する狭間川を見下ろすという位置にあることを考えれば、狭間川あるいは狭間川の流れる谷沿いのルート等に深く係わる祭祀であることが想定される。時期的には、出土した土師器坏の形態などから９世紀後半に位置づけられる。

４　縄文時代の遺構

調査区周辺で縄文時代早期に位置づけられる押型文土器が採集された。本来的には、３層に包含されるものと考えられる。前述したように調査区を設定した部分は、丘陵裾部の平坦部で狭間川を臨む位置にある。狭間川は丘陵を深く刻む渓流的な小河川で、河川沿いには平坦部はほとんどない。こういったなかにあり、調査区の位置は、小面積ながらも縄文時代の遺跡が形成される絶好の場所と言える。

以上のような状況をふまえ、遺物包含層の状況を確認すべく３層上面まで掘り下げた時点で、調査区内にＬ字状のトレンチを設定した。その後、遺構の広がりをみてトレンチを拡張した。

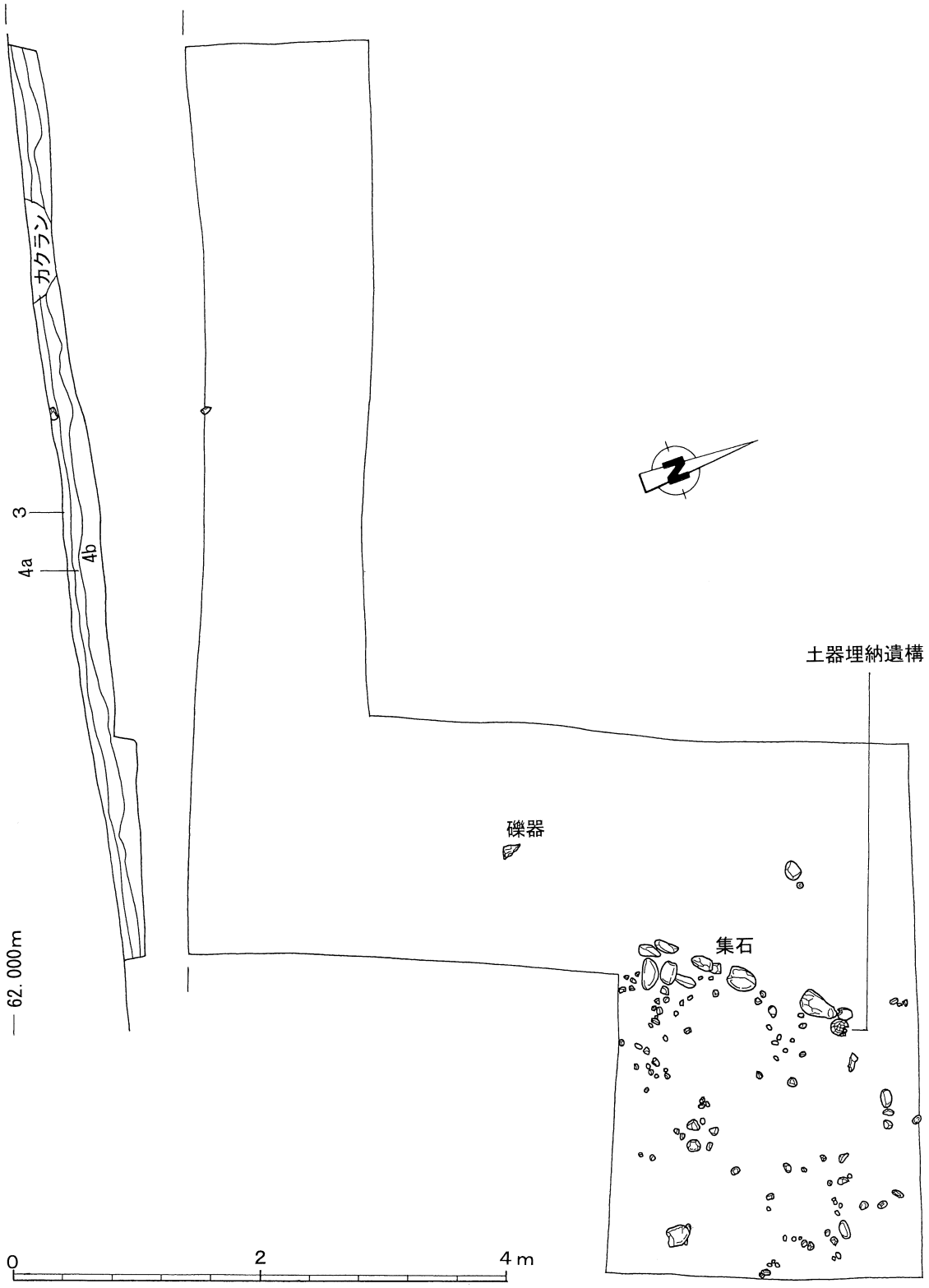
トレンチ（第５図）は３層上面で設定したが、トレンチを設けた平坦面は周辺の斜面部に比べアカホヤを含む２層の堆積が薄い状況にあった。縄文早期の包含層と推定された３層も当初の想定よりも薄く、約10cmほどであった。トレンチは、３層上面から30cmないしは40cm掘り下げ、４b層まで及んだ。その結果、遺物の包含は３層に限られ、その包含状況も非常に希薄なものであることが確認された。遺構としては、後段で詳述する集石遺構１基が検出された。遺物については、礫器１点（第８図８）が確認されたのみである。これらの出土層位はいずれも３層で、さらに下層の４a層および４b層からは遺構・遺物の出土は全く確認されなかった。検出された集石および礫器については、土器が１点も出土しなかったので厳密には時期を特定できないが、層位などから縄文時代早期の所産であることは確実である。

集　石（第６図）

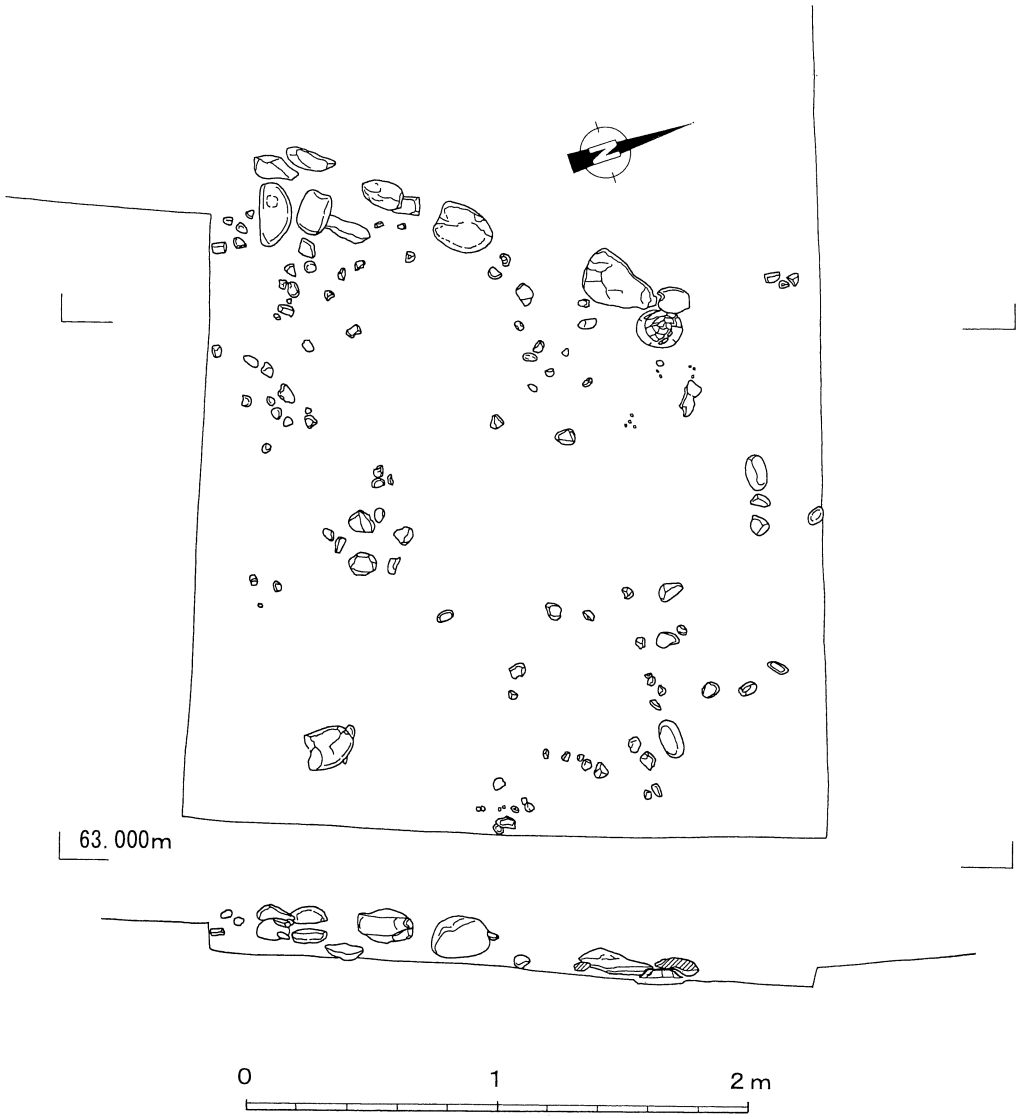
集石遺構は、径20cmから30cmの安山岩円礫や流紋岩が７個ほど集まったものが中心となる。４a層および４b層には10cmから20cmの礫を含み、これらの礫が３層中にも多くみられる。集石遺構を形成する礫は、いずれもこれらの自然礫と明らかに異なる。集石遺構の礫については、すべて顕著な被熱の痕跡は認められない。しかし、割れたものは認められた。これらの礫はおおむね緩やかな傾斜に沿うかたちで同一面上に置かれた模様で、掘り込みは確認されなかった。

このやや大型の円礫の東側に、数cmから10cmほどの小礫が、約２ｍ四方の範囲に広がる。円礫もみられるが、４a層や４b層中にみられる自然礫も多く混じっていた。これらは、先の大型の円礫群との関係から人為的なものである可能性は高い。この小礫群もすべて３層中から出土する。しかし、大型の円礫群と同様に明確な掘り込みは確認されなかった。

集石遺構に関して注目される点は、明確な被熱の痕跡を有する礫がみられないことである。縄文早期の遺跡でしばしばみられる集石遺構は、多くの場合顕著な被熱の痕跡が認められることから、アース・オーブン法やストーン・ボイリング法による食物調理に利用されたものと想定されている。また、明確な集石遺構がみられない遺跡でも、焼けた礫が包含層中から多数出土する場合がみられる。このような遺跡と対比した場合、本遺跡の特異性がみえてくる。併せて、後述するように出土遺物も極端に少なく、剥片石器を製作した痕跡も認められない。



第５図　虫喰谷遺跡縄文時代包含層調査トレンチ



第６図　虫喰谷遺跡集石

５　出 土 遺 物

土　器（第７図）

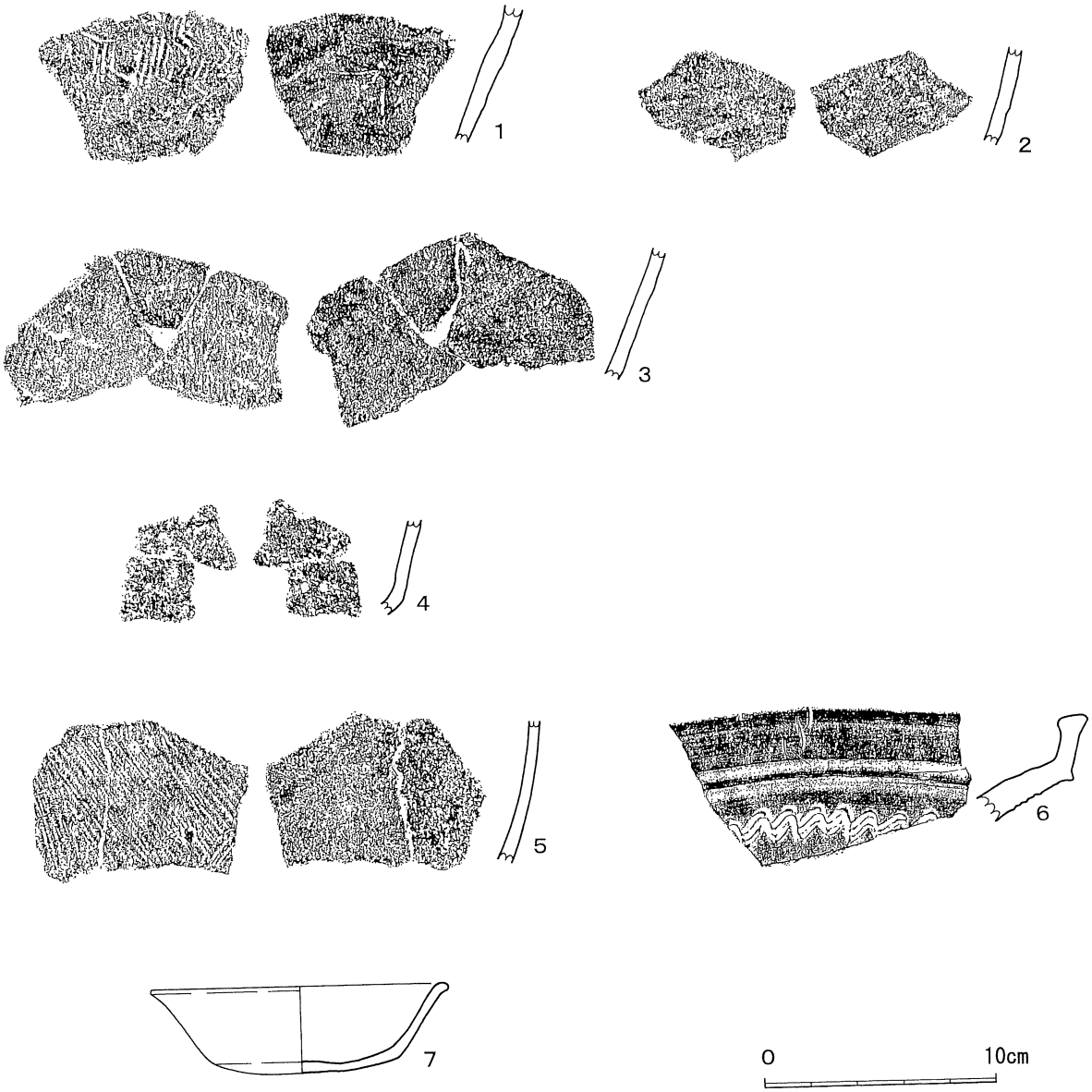
表面採集の土器を含めても、本遺跡からの出土土器は非常に少量である。しかし、時期的には縄文時代から古代までのものがみられる。

１は、調査区南側の隣接地で採集された押型文土器である。外面には、縦方向の山形文が施文される。山形文は大型のもので、波頂部から波頂部までの長さが２cmちかくある。また、外面の押型文は全面に及ばず、一部はナデ消される。内面は板状工具による横あるいは斜方向のナデが施される。時期については、口縁部や底部を欠くので必ずしも明確ではないが、山形押型文の大きさと施文方向から、縄文時代早期の押型文土器のなかでも新相に位置づけられるものである。

２も１と同じ地点で採集されたもので、内外面とも無文である。両面ともナデにより、器面が平滑にされている。時期的には１と同様に、縄文時代早期に位置づけられるものと考える。

３も１，２同様に、調査区南側の隣接地で採集された。外面は縦方向の条痕調整がなされた後、条痕をナデ消す。内面はナデにより平滑に仕上げられている。時期は、１，２と同様に縄文時代早期のものであろう。

４は調査区内において表採されたものである。器形は、くの字状に屈折したのちにやや外反気味に口縁へいたるものである。外面上部に、横方向の細い突帯が付される。外面の調整は、器面の荒れが著しく不明である。ま



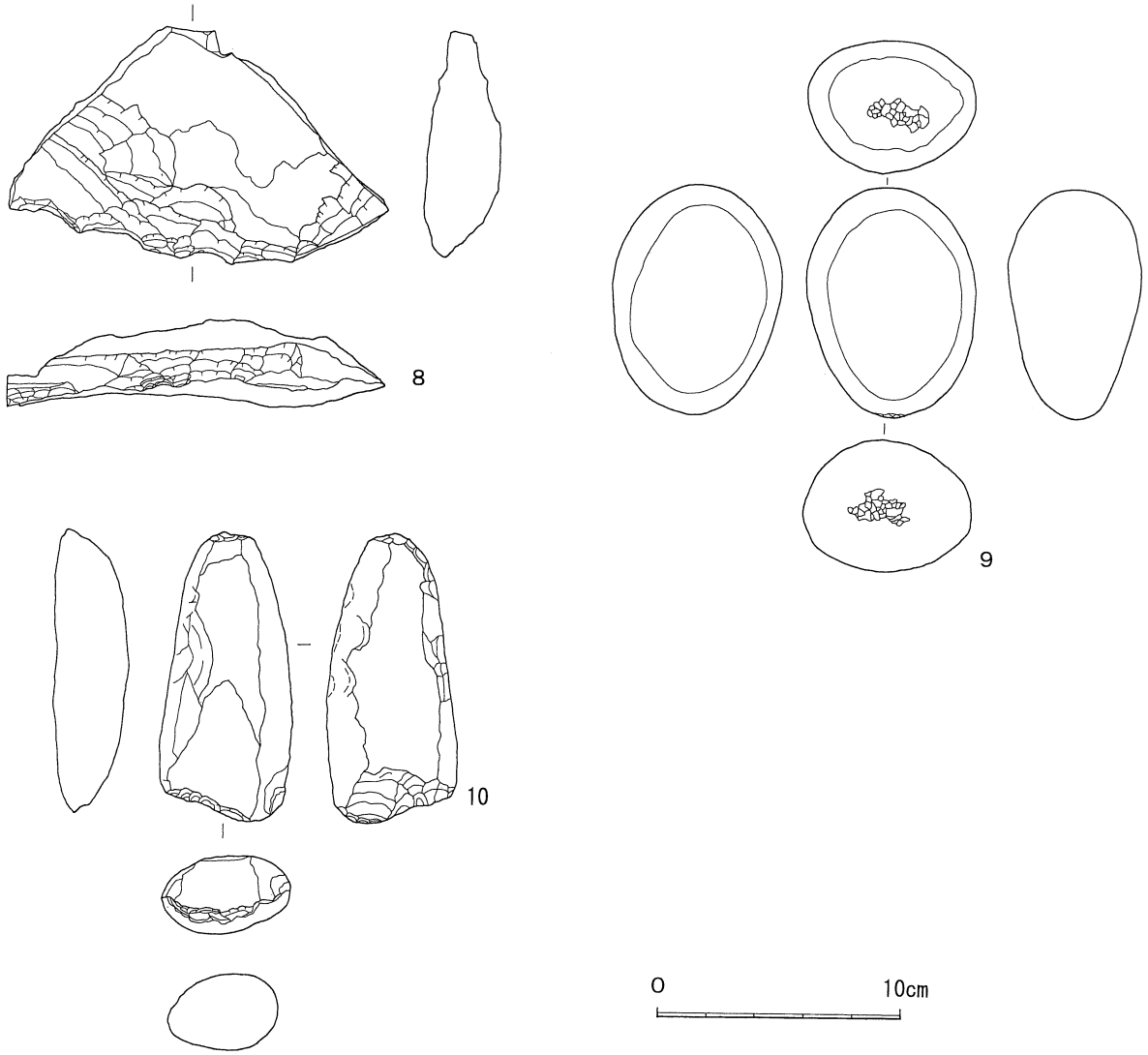
第７図　虫喰谷遺跡出土土器

た、内面はナデである。この土器は、その器形などから縄文時代前期の轟Ｂ式土器であると思われる。

５は調査区東側の谷を隔てた場所で採集された。外面には斜方向のハケ目調整が施され、内面はナデにより平滑にされている。弥生時代あるいは古墳時代の甕であろう。

６は調査区内で表採された須恵器である。甕の口縁と思われ、口縁部は二重口縁状に立ち上がる。頸部外面に櫛描波状文がみられる。

７は調査区内の柱穴状の小土壙から出土したものである。ほぼ完形品の土師器坏で、口径12.5から12.7cm、底径7.9cm、高さ3.7cmを測る。底部はヘラ切り離しであると思われるが、ナデが施されその痕跡は明確でない。体部は底部から斜方向に直線的にのび、口縁がわずかに端反り気味を呈する。器面は全体に摩滅が著しいが、体部は内外とも回転ナデか。時期的には９世紀後半に位置づけられる。



第８図　虫喰谷遺跡出土石器

石　器（第８図）

石器は、以下の３点が出土した。このうち、８と９は３層中の集石周辺から出土したものである。また、10は調査区内表採である。

８は質の悪い流紋岩製の礫器である。表裏面には節理面が残り、左側面は自然面、右側面上部は節理面で下部は折面である。三角形状を呈する偏平な剥片を利用し、最も長い縁辺の片側から剥離を行い片刃状の刃部を作りだす。法量は最大長9.75cm、最大幅15.55cm、最大厚3.1cm、重さ398gである。

９は磨石で、砂岩を利用している。表裏面及び側面を磨石として用いているが、長軸の両端には敲打痕がみられる。法量は、最大長9.1cm、最大幅6.88cm、最大厚5.44cm、重さ419.6gである。

10は砂岩製の磨製石斧で、最大長11.8cm、最大幅5.33cm、最大厚3.09cm、重さ264gである。全体を粗い剥離と部分的な敲打により形を整えたのちに、磨いて仕上げを行っている。刃部は一部を欠損するが、ゆるやかに湾曲する状況が観察される。

第4章　ま　と　め

虫喰谷遺跡は、山間の小河川に面したわずかな平坦面に形成された遺跡である。時代的には主として縄文時代、古代の遺構・遺物を確認することができた。

縄文時代は早期が主体となる。遺跡は①土器の量が非常に少ない、②石器の量が非常に少ない、③剥片等も出土せず石器製作の痕跡がほとんど確認されない、④集石遺構が１基みられるが、多量の焼石や焼石で構成される集石遺構がみられない、などの特徴をもつ。①、②から小規模な集団の利用で形成されたもので、その利用頻度も非常に少ない回数であったことが想定される。また、③、④からこの遺跡の利用時間が比較的短期間であったことが考えられる。すなわち、石器製作の痕跡を顕著に残したり、多量の焼石を使用する食物調理にかかわる行為を行っていないことから、ある一定期間留まり日常的な生活活動を行ったとするよりも、短期のキャンプ地的な利用であったと想定される。

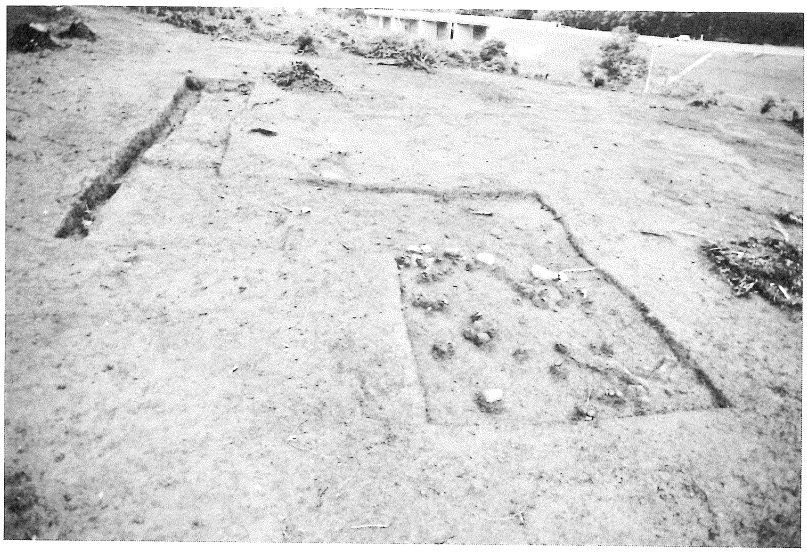
古代では、９世紀後半に位置付けられる土師器坏の埋納遺構と考えられるものを検出した。他に一般の生活に関連するような遺構・遺物がないことから、祭祀的性格をもつものである可能性が高い。本遺跡は松岡丘陵を東西に深く開析する狭間川を見下ろす位置にある。丘陵の西には、国府や大分郡衙が所在する大分川下流域の平野が展開し、丘陵の東側は海部郡へと続く大野川下流域の平野がみられる。これら両平野をつなぐルートがいくつかあったものと思われるが、狭間川の流れる谷沿いもそのルートのひとつとして考えられる。本遺跡の背後の山腹には、古代の須恵器窯跡である松岡古窯跡群あり、これら須恵器生産地と国府や郡衙とを結ぶルートも当然確保されていたであろう。よって本遺跡はこのような道に係わる祭祀、または国府や郡衙を鎮護するための祭祀行為を行ったことが考えられる。同様な性格を有する遺跡は、本遺跡から狭間川の谷を隔てて北側に広がる丘陵中の尾根先端部や丘陵上でも確認されている。これら一方平Ⅲ遺跡、上牧ノ内Ⅰ遺跡、上牧ノ内Ⅱ遺跡などでは、古墳時代や古代の土器が出土しており、この丘陵中において広くこのような祭祀行為が行われていたことが分かる。

報　告　書　抄　録

フリガナ	ムシクイダニイセキ
書名	虫喰谷遺跡
副書名	国道197号南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第118輯
編著者名	後藤一重
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－0021　大分市府内町３丁目10番１号 〒870－1113　大分市大字中判田字ビワノ門1977番地　大分県文化財資料室
発行年月日	2001年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
虫喰谷遺跡	大分市大字松岡字虫喰谷	322	新発見	33°11′35″	131°39′50″	1999．6．15～1999．7．2	約500㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
虫喰谷遺跡		縄文時代早期 古代	集石　１基 土器埋納遺構１基	押型文土器、石器 須恵器	



虫喰谷遺跡全景（東から）

虫喰谷遺跡縄文時代・旧石器時代調査トレンチ

虫喰谷遺跡集石

虫喰谷遺跡

国道197号南バイパス道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年３月31日

発行　大分県教育委員会
印刷　大野印刷有限会社